

小学校教師における発達障害児の自尊感情の支援に関する実践状況

Current status in educational practice about self-esteem for children
with developmental disabilities in elementary schoolteachers

小島 道生

KOJIMA Michio

I. 問題と目的

発達障害児の支援においては、自尊感情を低下させないことが、二次症状の予防のためにも、大切であると数多く指摘されている（例えば、小島, 2007）。学校教育現場においても、発達障害児の自尊感情を低下させない配慮や支援が求められている。そして、近年になり、発達障害児の自尊感情を高める試みを行った授業実践報告(市川, 2010) もされてきている。

発達障害児の自尊感情に関連する研究では、本人に対する面接調査などから、障害種別にその特徴が報告されている。例えば、ADHD児を対象とした自尊感情と自己評価に関する研究では、振る舞いと社会性において、定型発達児よりも低い自己評価を行うことが報告（中山・田中, 2008）されている。また、同年にわが国において報告された先行研究（佐藤・赤坂, 2008）でも、ADHD児の男子では、非ADHD児に比べて低いという結果を指摘している。さらに、LD児を対象とした自尊心やコンピテンスなどに関する研究では、非LD児に比べて低いか、両者に違いはないという指摘がなされている（Coleman & Minnett, 1992；Grolnick & Ryan, 1990；Kistner & Osborne, 1987）。また、LD児の1, 2年生男子は学業や運動についてうまくできなと感じており、クラスの仲間からも母親からも受け入れられていないと感じていると考察されている（伊藤, 1999）。さらに、高機能自閉症・アスペルガー症候群の保護者を対象とした研究からは、子どもの自尊感情が低い、やや低いと判断した保護者が75%も認められていたことが報告（小島・納富, 2009）されている。そして、その理由としては、「本人がよかれと思ったこと

で、叱られるなど、勘違いを多く経験しているため」、「学校生活では、友だちと同じようにはできないことが多いため」、「友だちなどから、からかわれたり、ばかにされる経験が多いため」、「教師や大人から注意されたり、叱られる経験が多いため」等が示されている。以上のことから、発達障害児の多くは、自尊感情を低下させている可能性が高く、またその理由の一つとして学校生活での友人関係や教師との関係などが影響している可能性が示唆される。

しかし、これまでの先行研究において、小学校という学校教育現場における発達障害児に対する自尊感情の支援の実態については十分に明らかになっているとは言い難い。したがって、日本の教育現場では、小学校教師における発達障害児の自尊感情の支援に関する実態が不明なまま、自尊感情の大切さや低下させない支援の必然性のみが叫ばれていると言えよう。

発達障害児の自尊感情を低下させず、より効果的な支援へとつなげていくためには、まずは小学校教師の発達障害児に対する自尊感情の支援の実態について明らかにし、効果的な支援方法について明らかにする必要がある。そこで、本研究では、小学校教師の発達障害児に対する自尊感情の支援の実態について、アンケート調査と面接調査により明らかにする。そして、通常学級と特別支援学級など担当学級による比較などを通して、それぞれの学級によって取り組まれている発達障害児に対する自尊感情支援の実態について明らかにし、効果的な支援の在り方について考察する。

II. 方法

1. 対象者

アンケート調査については、A県内の小学校187校を調査対象学校とした。そして、各学校宛に郵送によりアンケート調査の記入を依頼し、小学校各学年の担任の教師1名と特別支援学級、通級指導教室の教師に記入を依頼した。その結果、小学校139校(回収率74.3%)、中学校55校(回収率67.9%)から回収でき、小学校教師836名の調査協力が得られた。そして、自由記述に記述が認められた対象者のみを分析対象とした結果、370名(通常学級教師264名、特別支援学級84名、通級指導教室22名)となった。

面接調査については、現職の小学校通常学級の担任の教師8名(男性1名、女性7名)を対象として、個別に半構造化面接を行った。8名の現在の担任学級は、小学2年生と3年生が2名ずつで、それ以外は各学年1名ずつであった。20歳代3名、30歳代2名、40歳代2名、50歳代1名であった。なお、8名の所属学校は全て異なっていた。

2. 調査時期

アンケート調査は、2010年1月～2010年3月に実施された。面接調査は、2010年3月～2010年12月にかけて実施された。

3. 調査内容

アンケート調査については、記入者のプロフィールを尋ねる質問項目として、教員経験年数、現在の担当学年及び担当学級等について尋ねた。そして、自由記述の質問として、項目1「発達障害児やつまずきのある児童・生徒の自尊感情を低下させないために、工夫をしていること」と質問項目2「児童・生徒の自尊感情を高めるような授業を行った経験とその内容」について尋ねた。その他、調査用紙には、本研究の分析対象となっていないが、教師の発達障害児の自尊感情の支援に関する意識について尋ねる質問項目などが含まれていた。

面接調査については、「発達障害児の自尊感情の支援に関する現状と課題」に関する質問として、先行研究(小島, 2010)の調査結果を踏ま

え、主にTable 1に示した4点について尋ねた。

Table 1 質問項目

発達障害児の自尊感情を高める、あるいは低下を予防するための支援の必要性
発達障害児の自尊感情を高める、あるいは低下を予防するための支援内容
発達障害児の自尊感情を支援する上での困難性
発達障害児の自尊感情を支援する上で、必要となる情報

4. 分析方法

アンケート調査については、まず質問項目の記入の有無を分析した。次に、各質問項目の内容に基づき整理し、代表的な回答例としてまとめることにした。

面接調査については、回答を全て記録し、その内容について分析した。

III. 結果と考察

1. アンケート調査

1) 自尊感情を低下させないための工夫

質問項目に記述のあった対象者は小学校で361名であり、これは調査協力が得られた小学校教師全体の43.18%であった。次に、通常学級、特別支援学級、通級指導教室の3つに分類をして、分析を行った。そして、主な支援の内容について整理したところ、Table 2のようになった。

まず、通常学級での回答は257名認められていた。回答例を分析したところ、①個別の関わりの支援(101名)、②達成経験の確保(失敗経験の低減)(48名)、③集団づくりに関する支援(47名)、④担任以外の教師、保護者や専門家などの連携に基づく支援(15名)、⑤その他の大きく5つに整理された。

①個別の関わりの支援では、その子自身に対する褒めたり認めること、注意・叱責の低減、そしてその子の良さを認めるといった内容が盛り込まれていた。褒めたり認めることについては、「1日の中でできるだけ褒めるように心がけている」、「本人の認められて欲しいという領域について褒めるようにしている」「結果ではなく、努力の過程を褒める」といった、褒める量と質の向上が示されていた。また、褒める際には、

Table 2 支援に関する主な回答例

<p>通常学級</p> <p>一人一人に役割を与える。 子どもを学級の中で価値づける 失敗してもいいんだという雰囲気大切にしている 授業の中で、位置づけるようにしている 一人一人の良さを見つける活動を実施している 下学年や教師とのかかわりも大切にする できるだけ褒める機会の確保、褒める際には大勢の前で実施する 教師全員に対象児童の理解を促し、理解不足から生じる失敗経験を減らすように配慮 極力つまづきを低減できるようなスモールステップを導入している 対象児との間で目標を決め、努力している姿を褒め、目標を達成できた場合には、さらに褒める 周りの友達、学級、学年の中で位置づけられるに工夫している 保護者、専門機関と連携しつつ、褒められる機会、認められる機会を多く設定できるように連携を深めている 否定的な言葉を使用しないように配慮 得意な面を取り上げ、活躍できる場の確保</p>
<p>特別支援学級</p> <p>できないことから始めるのではなく、できることをまず褒める 他の児童など、みんなの前で褒める 結果ではなく、目標に向かって努力したプロセスを褒める 保護者との連携により、褒める機会を家庭でも実行してもらう 可能な限りスモールステップにし、失敗経験をしないように工夫 人前で、しかりすぎないように配慮 地域の人達の交流を通して、活躍できる場の確保 本人の得意な分野を発揮し、活躍できる機会を確保 人とかかわり活動を盛り込み、「ありがとう」「楽しかったよ」と言われる機会を設定 他の子との比較ではなく、本人ががんばっていた姿を振り返られるように支援 係活動など役割を与えて、達成感を味わわせるとおもに、お礼を伝える 子どものいいところ見つけをし、友達と共有したり、掲示する いま、自分ができないことは、助けてもらえばいいことを伝える 交流学习では、失敗経験とならないように十分な準備をしている 帰りの会などで、がんばったことを振り返る</p>
<p>通級指導教室での主な回答例</p> <p>得意な事柄の活動に比重を置き、達成経験を味わえるように工夫 スモールステップで達成感を味わわせる 他児と比較するのではなく、本児の伸びを褒める</p>

「全員の前で褒める」といったように、褒める場についても、他児から認められるようになるための支援へとつなげようとする工夫が報告されていた。その一方、叱ることについては、「個別に叱る」とされ、叱る場の配慮についても報告されていた。発達障害児は、褒められる経験が不足しがちであると一般的には言われている。こうした傾向を踏まえて、褒められる経験を大切にしたい実践が報告されていると考えられる。子どもの自尊感情を高める個別プログラム（ローレンス、2008）では、教師自身が活動を省みるためのコミュニケーション・チェックリストが示されている。その中では、非言語的行動、傾

聴する技能、信頼の確立、肯定的であること、期待を育むことなどの観点から具体的な項目が記載されている。教師が、より効果的な個別の関わり方の支援を展開するためには、教師自身の関わり方を見つめ直す取り組みとして、こうしたチェックリストを活用することも効果的であるかもしれない。

②達成経験の確保と失敗経験の低減では、「教材・教具の工夫を行いつつ、スモールステップを極力実践する」、「座席の位置を工夫して、支援の受けられやすい環境を確保する」、「小さな○を使うなど、本人なりにできた内容について、認める」、「T.Tの先生に自然な形でついてもら

えるよう工夫」,「ノートや連絡帳に一言添えるようにしている」といった具体的な教師の指導上に関する工夫や配慮が報告されていた。達成経験の確保と失敗経験の低減については,教材・教具の工夫や座席位置など物的・人的環境設定を工夫することで,改善を試みていると言えよう。学童期の発達障害児の学習支援においては,学習アセスメント,心理アセスメント,環境などのアセスメントという3つの視点から実態把握を行うことが大切であると指摘されている(青山,2009)。本研究の結果は,こうした実態把握を行うことで,より個に応じた適切な物的・人的環境設定の工夫が可能になると考えられる。したがって,達成経験の確保と失敗経験の低減のためには,子どもの適切な実態把握を行う必要性も示唆されよう。

③集団づくりに関する支援としては,「対象児に対して,係活動などの役割を与えたり,得意な分野を生かして活躍できる場を確保する」といった支援内容が含まれていた。集団づくりに関する支援としては,「一人一人の良さを認め合う学級集団作りを行う」など,一人一人を大切にしたい学級集団作りを実践していくといった内容が記述されていた。発達障害のある子どもがいる学級での授業及び学級経営の視点の一つとして,一人一人の良さや違いを認め合うことが指摘されている(小島,2008)。そして,所属感と活躍できる場の確保も発達障害児を含めた子どものやる気と自信を育むためには欠かせないとされている(小島,2008)。本研究は,こうした知見と一致するものであり,自尊感情低下を予防するための支援の工夫として一人一人を大切にしたい集団づくりは必要な観点であり,教育現場でも取り組まれつつあると言えよう。

④連携に基づく支援では,「担任以外の教師も,対象児について共通理解を深め,理解不足から生じるつまづきなどを減らす」「家庭と連携し,褒められる機会を確保」といった内容が認められていた。本児を取り巻く人々と連携することで,共通理解に基づく効果的な支援を展開しようとする実践が行われていると考えられる。また,本児のよかった内容などを学校だけでなく,家庭や他の教師と連携することで,何回も褒め

られる機会を確保していこうとする取り組みが報告されていた。

特別支援学級の回答は82名認められていた。回答例を分析したところ,①個別の関わりの支援(28名),②達成経験・活躍の場の確保(27名),③交流学習での支援(5名),④その他に整理できた。

①個別の関わりの支援では,褒めること,叱ること,さらには本人の想いを理解すること,良さに気づくこと,そしてできないことの対策を伝える,といった内容が含まれていた。褒めることについては,「努力している姿,努力した事柄などを褒めるようにしている」,「いつも,大げさに,褒めることを意識している」,「些細なことでも大げさにほめる」,「全校児童の前で褒める」などが認められ,褒めることに関する量と質の向上に関する記述が認められていた。そして,褒める場についても,周囲の子ども達も把握できるような取り組みが報告されていた。その一方,叱ることについては,「叱責をできるだけしないようにしている」といったように,量そのものを減らすことが報告されていた。本人の想いを理解することについては,「待つことを大切に」「自己決定を支援する」といった内容が含まれていた。さらに,「自分の良さに気づけるようにしている」,「できなかった時には,尋ねればいいことを伝えている」といった自己の良さへの気づきやできないことへの対応を伝えるといった内容も認められていた。特別支援学級での個別の関わりの支援では,本人なりの努力について積極的に認め,賞賛されるような機会を大切にしていると考えられる。そして,特別支援学級では,本人の良さの気づき,できなさへの対応など個別の関わりにおいても,賞賛叱責に関するだけでなく,多様な事柄について支援を展開し,自尊感情の低下を予防していると言えよう。

②達成経験・活躍の場の確保では,「当番活動などで,対象児のできる活動に取り組み,達成感を得られるようにする」,「スモールステップで繰り返し学習を行う」,「全校の子に感動を与えたり,全校を動かす活動に取り組んでいる」といった内容が含まれていた。教師との関係だ

けでなく、学級、さらには学校全体の中でも活躍できたり達成感を味わえるような経験を支援していく内容も含まれていることが明らかとなった。達成経験・活躍の場の確保は、特別支援学級においても、通常学級や通級指導教室と同様に、発達障害児の自尊感情の低下予防のために、取り組まれていると考えられる。

③交流学习での支援については、「交流共同学習のときに、本人ができるように練習したりして発表のとき困らないようにしている」「交流学习の時に、馬鹿にされたり、仲間はずれにされないように支援している」といった内容が含まれていた。交流学习での支援に関しては、本人に対して準備を行う支援と周りの児童に対して適切な理解を求める支援が大別されると考えられる。こうした取り組みが、全ての特別支援学級において取り組まれているかは不明だが、交流学习での失敗経験を予防することは、極めて大切になってくると推測される。今後も、こうした取り組みが普及していくことが期待されよう。

通級指導教室の回答は、22名認められていた。回答例について分析をしたところ、主に①個別のかかわりの支援(10名)、②達成経験の確保(9名)、③その他に整理できた。①個別のかかわりの支援としては、褒めることに関する内容が多かった。具体的には、「叱責をしないで認める言葉、励ましの言葉を多くする」、「他と比べず、その子の小さな伸びでも努力でも認めてほめる」、「否定的な言葉を使わず、肯定的な言葉でできる方法を示し、できた時には褒めるようにしている」、「言葉を録音して聞かせたり、VTRにとって見せたりして、何が良かったかを合わせてほめている」といった内容が含まれていた。日頃から否定的な言葉を使用せず、褒めることを心がけるとともに、単純に褒めるだけでなく、なぜ褒めているのかといった理由を本人に理解できる手立てを用いつつ、実践していることが報告されていた。さらに、「長所を見つけること、1つの事柄について良い面から見ることを、それを本人にきちんと知らせることを心がけている」や「興味・関心のあることや、本人なりに得意と思っていることをできるだけ多く

見つけたり、一緒にさがしたりしている」といった内容も含まれており、少しでも自分の良さに気づかせたり、本人の興味・関心を引き出すような支援が実施されていた。小学校通級指導教室の取り組みについて解説した柳田(2010)によれば、指導内容を選定する際の視点として、子どものよさを捉え、それを活かしたり伸ばしたりする長所活用型の視点と、将来的な視野に立って課題を捉え、改善したり克服しりする自立活動の内容選定の視点がある。自分の良さに気づかせたり、本人の興味・関心を引き出すような支援は、長所活用型の視点と言える。長所活用型の視点の法が、子どもの自尊感情の支援には適しているのかもしれない。

②達成経験の確保については、「スモールステップで取り組めるようにプリントを作成したり、教材をつくる」、「個別の問題を作成し、達成感を味わえるようにする」、「在籍学級で取り組む前に練習し、自信をつける」、「できたことを目に見える形で残す(写真やプリント、作品等)」といった内容が含まれていた。主には、個に応じた教科学習の支援を実施するなかで、教材・教具の工夫やスモールステップなどの実践により、少しでも達成感を味わえるような工夫が報告されていた。また、通級指導教室の時間だけでなく、在籍学級での活動にも配慮をし、在籍学級でも達成経験をえられるような活動に取り組むことが報告されていた。さらに、達成感を得られやすくするために、できた事柄を視覚的に残すことで、本人にとって実感を抱かせやすくするような提示の工夫も認められていた。達成経験の確保は、通級指導教室において、通常学級や通級指導教室と同様に、大切にして取り組んでいると考えられるが、より一層達成感を得られやすく、持続できるように、在籍学級と連携をしつつ支援を展開していると推察される。

2. 自尊感情を高める授業実践

自尊感情を高める授業について尋ねたところ、記述が認められた回答は141名であり、これは調査協力が得られた小学校教師全体の16.9%であった。次に、小学校は通常学級、特別支援学級、通級指導教室の3つに分類をして、分析を行っ

た。

通常学級における回答例を分析したところ、道徳の授業を取り上げた回答が31名と最も多く、記述があった回答中22.0%であった。取り組みの具体例としては、「この世に生を受けたことに喜びと感謝の気持ちを持ち、自分を大事にしてほしいという話をした」、「誰にでも得意なこと苦手なことがあり、みんなそれぞれ個を大切にしていこうという内容」、「自分の良さを記述させ、目標をもって取り組む心情を育てる授業」、「SSTの導入」などがあった。その他の取り組みとして、「自分(生命)の誕生を考えさせる」、「自分のがんばったことを発表交流しあい、お互い褒め合う場を設けた授業」といった内容が報告されていた。なかでも、「仲間の良さを見つけ、仲間からのコメントを画用紙にまとめ、自分の成長に喜びをもたせる」といったような、他者から自分自身に関するコメントをもらい、自分自身の成長に気づかせるような取り組みが多くなされていた。

しかし、その一方で「自尊感情を意識して取り組んだことは、ない。」や「取り組んでみたものの、確実に力につながったかというのは疑問」という回答もみられていた。そもそも記述が認められていた割合も高くはなく、自尊感情に焦点をあてた授業実践は、まだ十分に組み立てられていない可能性もあると考えられる。さらに、自尊感情の授業がどの程度成果を上げているかといった客観的な評価については、課題が残る。今後は、こうした課題に対する解決方法を模索していく必要がある。

特別支援学級の回答例について分析したところ、通常学級とは異なり、特定の教科名に関する回答は、道徳や生活単元学習が報告されていたが、少数であった。そして、「日常の取り組みの中で、意識している」といったような回答も複数みられ、特定の教科というよりも、むしろ日常的に意識して取り組んでいる状況であると推察された。具体的な回答例をみていくと「お互いの良いところ・頑張っているところを褒める手紙を書き、交換する」、「頑張ったことの発表会を授業参観で行う」、「自分ができるようになったこと、がんばったことをカルタに表現し、

仲間同士発表交流し、褒め合う・認め合う場をもつ」、「興味のあることや得意な活動について、多くの人の前で発表をする」といったように自己の成長や成果を友人や保護者など多くの人達から認めてもらうような機会の設定が報告された。また、「自分が生まれた時の親の思いを知る。」、「生命の尊さ、自分の心の強さを書く」といったように、保護者の思いを知るとともに、自己内省の機会を設定することで、自分自身の良さに気づけるような支援が報告されていた。

通級指導教室の回答例について分析したところ、回答は11と少なく、その中でも授業の具体的な実践事例については、少なかった。具体的には、「自分を見つけ肯定的に捉える」、「1時間の自己目あてを持たせ、その授業の最後には達成感、成就感が味わえるようにしている」、「トラブルがあった時のことを自己モニターさせ、自分がどうすれば上手くいくかを考えさせて、次にできたことを認め、褒めている」といった回答があった。通級指導教室という限られた時間の中で、自尊感情に焦点をあてた授業を行うというよりは、教科学習支援などの中で、目標設定や課題の達成状況などから、自尊感情を高められるような支援を展開しているのが現状と推測される。

3. 面接調査

通常学級の教師8名に対して、半構造化面接を行った。発達障害児の自尊感情を高める必要性の認識については、8名全員の教師が「自尊感情を高める必要性は感じることもある」「自尊感情を低下させないように予防することは必要である」といった回答をしていた。さらに、「発達障害児以外にも、自尊感情を低下している児童はみられるので、発達障害児に限ったことではなく、全ての児童の自尊感情を高めたり、低めないような支援の必要性を感じる」という意見も認められていた。また、「実際の現場では、発達障害児だけに焦点を当てて、自尊感情を考えているわけではなく、全ての児童の自尊感情を考えている」といった意見もあった。いずれにせよ、多くの教師は発達障害児も含めた児童の自尊心の低下を予防し、低めている児童に対し

ては、高めるような支援が必要であると認識していると考えられる。

「発達障害児の自尊感情を高める、あるいは低下を予防するための支援内容」については、8名中6名が「褒めることを大切に、過度な注意・叱責などを避ける」といった賞賛・叱責に関する報告があった。具体的には、「些細なことを大げさに褒めるとともに、注意・叱責の際には人格を否定しないよう行動を注意する」「褒める時は、大勢の前で実施し、注意・叱責の際には個別に対応をする」といった意見があった。さらに、「本人の得意な領域をいかして活躍の場を与える」「係活動など、役割を与え、周囲の友達からも認められるような機会をしている」といった、できる限り本人の得意領域をいかして、集団の中で活躍でき、周りの友達からも認められるような機会を確保していくといった取り組みが報告されていた。また、「スモールステップを大切にされた指導により、達成経験を味わわせる」といった、指導上の工夫から達成経験を抱けるような経験をさせていくことで、自尊感情を低下させないような取り組みの工夫が指摘されていた。

「発達障害児の自尊感情を支援する上での困難性」については、8名の回答は様々であった。「日頃から、自尊感情を強く意識して支援をしているわけではないせいもあり、困難さを感じるようなことはない」という意見から「自尊感情の低下している発達障害児の支援に対して、どのように対応すれば自尊感情が高まり、もう少し自分自身を大切に思ってくれるのか、非常に悩んだ」という意見まで、困難性の度合いにも幅が認められていた。こうした意見の背景には、当然のことではあるが、実際に接した発達障害児の自尊感情に実態が影響していると考えられる。また、「発達障害児の自尊感情を支援するだけでなく、そもそも児童の自尊感情を支援するための具体的な方法が、よくわからない。」といったように、自尊感情の支援の方法論に関する困難性を指摘する意見もあった。さらに、「自尊感情を支援する前に、児童の自尊感情をどのように捉えていいのか、わかりにくい」といった、自尊感情そのものに対する実態把握の難しさも

指摘されていた。したがって、小学校の教育現場では、児童の自尊感情をどのように捉え、また具体的にどのように支援していくのかという方法論の困難さも顕在化していると考えられる。

「発達障害児の自尊感情を支援する上で、必要となる情報」については、8名中7名が「他の教師が取り組んでいる、発達障害児の自尊感情の低下を予防したり、高めたりしている実践的な情報」を求めていた。したがって、多くの教師が実践的な取り組みに関する情報量の不足を認識していると考えられる。これは、現段階においては、教育現場での発達障害児も含めて児童の自尊感情を改善するような具体的な実践の方法論が十分に浸透していないことを示唆していると言えよう。既に、教室で自尊感情を高める具体的な方法論や実態把握の方法などは示され（ローレンス、2008）、わが国でも実践報告（高橋、2001）が示されてきている。したがって、自尊感情を高める具体的な方法論に関する情報の幅広い共有と普及が求められていると言えよう。

IV. まとめ

本研究の結果から、小学校教師の発達障害児の自尊感情に関する支援の工夫や授業実践の取り組み状況、さらには現在求められている情報などが明らかとなった。アンケート調査からは、通常学級、特別支援学級、通級指導教室における支援工夫の共通点として、「個別の関わりでの支援」と「達成経験の確保」があった。逆に、それぞれの学級で特徴的な取り組みとして、通常学級では「集団づくりに関する支援」や「連携に基づく支援」があった。特別支援学級では「交流学习での支援」、通級指導教室では「在籍学級での活動にも配慮をし、在籍学級でも達成経験を得られるような活動に取り組むこと」などがあげられた。

次に、自尊感情を高める授業実践について分析したところ、通常学級では「道徳」の中で取り上げていることを最も多く、様々な取り組みが報告されていた。しかし、そもそも記述量も少なく、「授業としては取り上げてない」という回答も認められるなど、通常学級で自尊感情に

焦点を当てた授業が盛んに取り組まれているとは言いがたい現状があった。そして、取り組んだ授業の評価をどう行うのかという課題も明らかとなった。面接調査からは、発達障害児の自尊感情の支援に関する具体的な方法論や実践に関する情報が不足しており、実際の支援においては実態把握の困難さも指摘されており、課題が浮き彫りとなった。

V. 文献

- 青山真二 (2009) 学童期の学習支援. 発達 障害の臨床的理解と支援. 石井哲夫 (監修) 3 学齢期の理解と支援. 安達潤 (編著), 金子書房, 48-54.
- Coleman, J.M., & Minnett, A.M. (1992) Learning disabilities and social competence: A social ecological perspective. *Exceptional Children*, 59, 234-246.
- Grolnick, W.S., & Ryan, R.M. (1990) Self-perceptions, motivation, and adjustment in children with learning disabilities : A multiple group comparison study. *Journal of Learning Disabilities*, 23 (3), 177-184.
- 市川令子 (2010) 第 8 章 自己 ③授業実践 事例の紹介-通常学級で自尊心を高める 授業の開発. 発達障害研究から考える通 常学級の授業づくり. 宇野宏幸・井澤信三・小島道生 (編著), 金子書房, 152-156.
- 伊藤佐知子 (1999) 低年齢学習障害児男子のコンピテンスに関する研究. *LD (学習障害) -研究と実践-*, 8(1), 57-65.
- Kistner, J., & Osborne, M.(1987) A longitudinal study of LD children's self-evaluations. *Learning Disabilities*, 23(8), 483-490.
- 小島道生 (2007) 軽度発達障害児の自己概念. テキスト 特別ニーズ教育. 日本特別ニーズ教育学会 (編) 荒川智・高橋智 (編集代表), ミネルヴァ書房, 149-155.
- 小島道生 (2008) 第 2 章 やる気と自信を育むために. 発達障害の子がいるクラスの授業・学級経営の工夫. 小島道生・宇野宏幸・井澤信三, 金子書房, 10-13.
- 小島道生 (2010) 小・中学校における発達障害児の自尊感情の支援に関する意識. 日本LD学会第19回大会発表論文集, 548-549.
- 小島道生・納富恵子 (2009) 高機能自閉症・アスペルガー症候群のある子どもの自尊感情と支援-保護者に対するアンケート調査からの検討. 日本LD学会第18回 大会発表論文集, 393.
- ローレンス, D. 小林芳郎 (訳) (2008) 教室で自尊感情を高める. 田研出版.
- Lawrence, D. (2006) *Enhancing self-esteem in the classroom 3rd Edition*. Sage Publications of London.
- 中山奈央・田中真理 (2008) 注意欠陥/多動性障害児の自己評価と自尊感情に関する調査研究. *特殊教育研究*, 46(2), 103-113.
- 佐藤正恵・赤坂映美 (2008) ADHD児の自尊感情とそれに影響を及ぼす要因について. *LD研究*, 17(2), 141-151.
- 高橋あつ子 (2001) 自己肯定感促進のための実験授業が自己意識の変化に及ぼす効果. *教育心理学研究*, 50(1), 103-112.
- 柳田直子 (2010) 小学校通級指導教室からのレポート. 井澤信三・小島道生 (編著), 障害児心理入門, ミネルヴァ書房, 209-212.
- 付記：本研究は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究 B 課題番号 21730723）の助成をえた。